

各 駅 停 車

高 見 順

各 駅 停 車

高 見 順



每 日 新 聞 社

各 駅 停 車

〔著者と申し合わせに
より校印を省略します〕

昭和 29 年 12 月 15 日 印刷
昭和 29 年 12 月 20 日 発行

定. 250

著 者	高 見 順
発 行 者	千 歳 雄 吉
印 刷 所	中央製本印刷株式会社

発 行 所 毎 日 新 聞 社

東京都千代田区有楽町一ノ一一
大阪市北区堂島上二ノ三六
門司市清瀬町一ノ九〇二
名古屋市 中村区堀内町四ノ一

目

次.

各 駅 停 車 : 1

第一章	警 笛
第二章	青 磁
第三章	交 錯
第四章	世 代
第五章	連 想
第六章	翌 日
第七章	点 字
第八章	身 辺
第九章	多 事

第十章 火花

第十一章 告白

第十二章 帰宅

色っぽい時間 211

装本

内田武夫

各 駅 停 車

第一章 警 笛

一

スリッパの足が滑りそうなくらい、つやつやと磨きこんだ階段を、早瀬^{はやせ}が友人のあとから降りて行く。

「さっきの話だが」

友人は振りかえって、小声で、

「みんなのいるところでは、どうも、しにくい話なので、あれなりになったが、これから銀座の方へでも、ちょっと、出てみないか」

と、早瀬に言った。ある大きな会社の重役であるこの友人に、早瀬は息子の昭夫^{あきお}の就職を頼んでいた。その友人の会社へ入れて貰おうというのである。

「おともしよう」

と、早瀬は言った。早瀬も商事会社の専務をやっている。

「品のいいバーがあるんだ」

友人はその名を言って、早瀬に、そこを知らないかと尋ねた。

「バーは、とんと……」

知らない、早瀬は答えた。友人は、自分もバーは不案内の方だが、と言って、

「そこだって、この間、ひとに連れられて行ったばかりのところだ」

苦笑しながら、

「バーも、しかし、なかなかいいね」

料亭の方は、お互に商売関係の宴会から、馴染があるが、場合によると連日の、その料亭でのつきあい酒だけで、二人とも精一ぱいの形で、それ以上にバー歩きなどをする暇はない。元氣もないというところだった。特に早瀬は友人の間で「かた物」として通っている。

今夜の席は、商売を抜きにして、友人同士でなんとなく雑談をしようという集まりだった。みなそれぞれ、車を持っている。

玄關へ見送りに出た芸者たちの嬌声を背にして、外へ足を進めながら、早瀬は、

「君の車に乗せて貰おう」

と、友人に言った。自分の車は、あとから、ついてこさせることにした。バーへ行くはいいが、また何かの都合で、話がしにくくなるような状態だといけない。

早瀬に乗せた友人の車が、車の奔^{ひし}めいている料亭街を抜けて、大通りに出ると、

「昭夫君のことだが……」

そう言つて、友人は口をつぐんだ。何か言い渡っている。早瀬は、そこで、

「試験が駄目だったのか」

正式の第一次試験をパスしたら、昭夫を頼みたいと思つていたが、あ、あ、あ、の試験で落ちたのでは話にならない。

「それは、いいんだ」友人は遮るように言った。

「それは、パスしたのか」

早瀬の問いに、友人は無言の頷^{うなず}きをすると、独語の低さで、

「君は、……勿論、知らないんだろな」

そして一層言いにくそうにして、

「そんな程度のことじゃないんだ」

「すると、何か、昭夫に何か問題が……？」

「うん」

早瀬は、もしかやといった気持ちで、

「左翼の方の問題でも……」

「そうなのだ」

友人は、口がきき易くなった感じで、

「相当、君、深入りしているね」

「昭夫が？ ふーん」

息子の昭夫がその方面の勉強をしていることは、書棚の本を見て、早瀬も知っていた。だから、時、昭夫に早瀬は打診的な質問をしていたが、別に昭夫は、学生運動をしているというような深入りの様子はなかった。そこで早瀬は、これからの世の中を渡って行くには、一応の常識として、そうした勉強も必要だろうという風に考えて、取り立てて咎め立てはしなかった。

「気を悪くしないで、聞いて貰いたいんだ」

学生時分からのこの友人は、むしろ早瀬に詫びるような口調で、

「君の社でも、やっていることだろうが、新入社員の思想関係は、あとでいろいろ面倒なことがおこると困るので、一応こっそり、社として調べることになっているんだ。一遍、社へ入れたら、たとえ共産党員だと分っても、なかなか退社させられないからね」

「昭夫は党员なのか？」早瀬は生唾をのんだ。

友人は、それには答えず、

「他ならぬ君の息子さんなのだから、僕もなんとか、君の希望にそいたいとは思っている。僕が責任

を持って引き受けてもいいのだが、その代り、昭夫君にも、社の内部では何か事をおとすことはしないと、その点だけ、君から言っというて貰わんと……」

「……驚いた」

早瀬は、——早瀬も返事を、そっちのけにして、

「昭夫が、そこまで行つてようとは、思わなかった」

「そこまでと言うと、君も、うすうす……？」

知っていたのかと、毒のある言い方ではなかったが、それだけにまた、早瀬は心の痛みを覚えて、

「すまない。君に、とんだ迷惑をかけた」

「いや、何も迷惑など……」

友人は手を振って、

「昭夫君が、果して入党しているかどうか、そこまでは、はっきりしてないんだ。君も、だから……」

「だから？」

「今、急に脱党しろのなんのと、強く出ると、却って昭夫君の気持を逆の方に追いやることになるかもしれない。むずかしいところだ」

「ふむ」

「昭夫君も、学校を出て会社勤めをしたら、きっと、気持が変ってくるだろう」

「……………」早瀬は自分の沈黙を、にがいものと感じた。この早瀬も、昭和の初め頃、大学にいた時は、左翼学生だった。その事実を友人は知っている。友人の言葉は、早瀬が「会社勤めをしたら、気持が変った」ように、早瀬の息子の昭夫も、そうなるだろうという意味に違いなかった。

「バーへ行く必要がなくなったが」

友人は、銀座の人波に眼をやって、

「でも、ちょっと、寄ってみるか」

二

友人の言った通り、品のいいバーだった。西洋骨董の部類に入りそうなゆったりした椅子に、二人は腰かけた。

「君の家へも、しばらく行かないが、その後、いろいろと、ふえたろうな」

早瀬の好きな骨董のことを、そう言って友人は、ブランドーのグラスに手をやって、

「そのうち、ひとつ、見せて貰いに行こう」

「ふむ」心の重い早瀬は、口も重かった。

「骨董もいいが、しかし」

友人は、早瀬を陽気にさせようと努める笑顔で、

「こういうお嬢さんもいいだろう」

側に、つつましく侍った若い女に、空いた手を向けて、

「雅枝まさえさんと言ったかな」

「はう」

と、頭を傾けたその雅枝は、お嬢さんと、友人の言うのが不自然でない淑やかさだった。

「おいくつ？」と、早瀬は言った。

「君、そんな……」

友人は、丸いグラスを、両手で包むようにして、

「女性の齢を、聞く奴があるものか」

「いいだろう。まだ若いんだから」

と、早瀬は友人に言った。その早瀬と友人の、どちらへともなく、

「三です」

と、雅枝は言った。

「二十三？」早瀬は、自分の娘より一つ上だなと思った。そうして、この雅枝を、どこかで見たことのある顔だと思った。誰か自分の知っている女に似ているのかもしれない。

「三とは案外、行ってるんだね」

と、友人は遠見をきかすような眼をした。

「それこそ、失礼じゃないか」

と、早瀬は笑って、

「しかし、君……」

心が晴れかけると、また心に暗い憂悶が蔽いかぶさってくる。

「なんだい、早瀬君」

友人に促されて、早瀬は、

「君んところは、子供がまだ、ちいさくていいな」

「え？」

「苦勞がなくて……」

「なにを言ってる」

友人はブランドーを傾けて、

「ちいさいままでいる訳じゃないんだから、同じことじゃないか。おっつけ大きくなって、僕も苦勞させられるのかと思うと、うんざりする」

「君んところは、大丈夫だろう」

「どうして？」

「……………」

友人は早瀬と違って、その学生時代に左翼だったりしなかった。それを、早瀬は自分の口から言う気にはなれなかった。

「赤いのも困るが、逆に放蕩息子になられても、これはこれで、大弱りだ」

友人は、そして、こんな話はよそうと言わんばかりに、声をあげて笑って、

「君も、ひとつ、若い細君でも貰うんだな」

返事に窮した早瀬は、なんとなく雅枝に顔を向けた。当意即妙の返事を、自分に代って雅枝にして貰おうというような気持が、あったのかもしれない。

雅枝は、しかし、黙っていた。黙っていたが、言葉よりもっと雄弁とも思える微笑を浮べた。その微笑を、雅枝は早瀬ひとりに向けていた。

早瀬は何故か眼をそらせた。その早瀬を友人は、面白そうに見ながら、

「そして君、気分転換をやるんだな」

「気分転換？」

「息子の問題は、息子に解決させるさ」

「自分の気分転換のために、再婚するんでは、相手の女性が気の毒だな」

早瀬はこれを自分でも、詰らない言葉だと承知していた。そしてそんな詰らないことを言う自分

を、詰らない人間だと思ふのだった。その早瀬に、友人は、

「気分転換がお氣に召さないなら、言い直して……生活の転換。これなら、どうだ」

「生活の転換か」

早瀬は、このとき、この自分も詰らなければ、自分の生活も実に詰らないということを、急に何か、心に窓がぼっかりと開いたかのように、はっきりと強く感じた。

「そうだ。君の言う通りだ」

頷くと、自ずと早瀬の眼が雅枝に向けられた。そこに、もう一度、あの微笑を期待したのだが、期待を裏切って雅枝は、すっと立った。

「お代りを、お持ちしましょうか？」

ひややかとも取れる声で雅枝は、空のグラスを卓に置いた友人に、そう言った。

「う。貰おう」

と、友人は言った。早瀬のグラスには、まだ飲み残しがあった。というより、殆んどまだ飲んでない。雅枝は空のグラスを、すくうようにして持つと、激流の魚がひらりと身をひるがえすあの敏捷感を早瀬に与えつつ、その場を去って行った。最初の印象の淑やかさと、まるで違う面を見せた。その雅枝のほっそりとした後姿を、早瀬は、手から逃がした魚を追うような眼で見ている。

そこへ、三人連れの新しい客が入ってきて、